

「明けない夜」と「暮れない日」

学 長 安 酸 敏 眞

卒業生・修了生の皆さま、ご卒業ならびにご修了おめでとうございます。日々の弛まぬご努力が本日のこの栄えある学位記授与式に結実していることを思い、ここに学長として心からの祝意を表する次第です。

二〇一九年の末から二年以上にわたって、世界的に猛威を振るってきた新型コロナウイルス感染症は、二〇二二年三月のこの時点でも収束する気配を見せていません。この間、繰り返し発令された緊急事態宣言やまん延防止等重点措置によって、それまでの平凡な日常生活が一変し、大学での勉学も課外活動も悉く制限されました。二度とない青春時代の学生生活ですので、皆さんにとってとても気の毒なことでした。しかし人類の歴史のなかでは、戦争や疫病、あるいは天変地異などによって、ありきたりな日常の営みすらまななかつた時代は幾度もありました。けれどもいつまでもこの状況が続くわけではありません。「明けない夜はない」と言われるように、いつかは長いトンネルを抜けて、必ず事態が好転してくるはずですから、希望を失わず、また自暴自棄にならないで、やがて明け染める夜明けのときを辛抱強く待ちましょう。

さて、昨今このようなコロナ禍の閉塞感のなかで、「明けない夜はない」という表現をししばしば耳にしますが、これは一般的に、シェイクスピアの『マクベス』の台詞に由来すると言われています。その作品の第四幕第三場の最後の箇所、スコットランドの王子マルカムは「長い夜にも必ず夜明けは来る」(木下順二訳)、あるいは「どんな長い夜もいつかはきっと明けるのだ」(小田島雄二訳)と語ります。原文は“The night is long that never finds the day.”となっています。この英文を上記のような日本語に訳したのは、なかなかの文才だと思いませんか。「夜明けに決してならない夜は長い」などと訳したのでは、まったくの興醒めどころか、そもそも意味をなしません。文学の素養というものは、あるいはより一般的に教養というものは、こういうところに発揮されてくるものです。

ところで、「明けない夜はない」ということが真実だとすれば、「暮れない日はない」というのもまた然りでしょう。もちろん、厳密に言えば、「明けない夜」といわれる「極夜」(polar night)という現象と、「暮れない日」に相当する「白夜」(white night)という現象が、北極や南極などの極地方では起こります。地軸は公転軸に対して約 23.4 度傾いており、したがって公転面に対する角度は約 66.6 度です。地球の自転によって昼と夜の交換が生ずるのですが、この地軸の傾きと地球の公転とが相俟って、極地方の特定の地域では、「極夜」と「白夜」という珍しい現象が生じます。「明けない夜」はおそらく堪えがたいものですが、「暮れない日」もそれに劣らず難儀なはずですが。

いずれにせよ、この地球上の大部分の地域において、「明けない夜はない」ように、「暮れない日はない」のです。これは何も自然現象に限った話ではありません。われわれの人生につい

ても、これはまた言えることです。太陽が出ている時間帯が日あるいは昼だとすれば、日ないし昼はさしずめ明るい希望に満ちたとき、勢いが盛んであるとき、物事が順調に進んでいるときを意味します。しかし上り坂の時期や盛りの時期は、いつまでも永遠に続くものではありません。オリンピックのスノーボード、ハーフパイプ三連覇のショーン・ホワイトも、今回はメダルをとることが出来ませんでした。このように絶頂を極めた後には必ず下降・衰退・凋落が始まり、ついには華麗な経歴に終止符を打つときが来ます。昼はたそがれて薄暮となり、やがて漆黒の夜になるということは、宇宙の運行がわれわれに教えるところです。同様に、どんなに幸福な人生を送っていたとしても、やがては健康に陰りが射して老いを迎え、ついにはこの世に別れを告げなければなりません。「人生一〇〇年」などという甘い言葉にほだされて、この厳粛かつ冷徹な現実から目を背けてはなりません。仏教ではこの世で避けられない四つの苦しみを、生老病死と呼んでいます。これを避けることのできる人間はいないのです。

さて、病気とか老化とか究極の死は別にしても、人生には予期せぬ不幸がまたつきものです。物事が順調に運んでいるときに、ある日突然災難が降りかかることもあります。まさに「好事魔多し」です。今般の新型コロナウイルスのパンデミックもその一例です。二十世紀後半から二十一世紀初頭にかけて、新自由主義的な「欲望の資本主義」の上げ潮に乗っていた人類は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、突如として「長い夜」に突入する羽目になりました。人類は成長や発展の甘い美酒に酔いしれて、あたかも「暮れない日」が半永久的に続くかのような、幻想あるいは錯覚に陥っていなかったのでしょうか。しかし進歩や発展、あるいは右肩上がりの経済成長というものは、無限に続くことはありえません。栄枯盛衰は歴史の常であり、好調と不調、成長と衰退、アップとダウンは、人間の避けがたい定めなのです。英語の諺に“The longest day must have an end.”というのがあります。どんなに長い日にも終わりはある、ということです。つまり「暮れない日はない」のです。でも、だからこそ人生ははかなく、いとおしく、またかけがえのないものなのです。

卒業式という晴れやかな式典において、人生の悲愴な側面に言及することは躊躇われましたが、しかしこれから社会人として長い人生を歩みだす門出だからこそ、人生の二重の真実について敢えて触れた次第です。卒業あるいは修了される皆さんには、「明けない夜はない」ように、「暮れない日はない」ということを肝に銘じていただきたい。そして物事が順調に運んでいる順境のときには、「暮れない日はない」ということを、希望の光が見えない逆境のときには、「明けない夜はない」、「陽はまた昇る」と信じて、人生を逞しくかつ謙虚に歩いて欲しいと思います。昼にも夜にも終わりがあるように、順境にも逆境にも、嬉しいことにも辛いことにも、必ず終わりがあります。ですから、表面的な浮き沈みに一喜一憂せず、「時が良くて悪くても」おのが最善を尽くし、前向きな気持ちで頑張ってください。大事なことは、努力を怠らないこと、おのが節度を守ること、忍耐強くあること、そして希望を失わないことです。これをもって学長式辞とさせていただきます。